

福島・江平遺跡 えだいら



江平遺跡は、福島空港の南西約1kmの地点に位置し、遺跡は阿武隈川東岸の河岸段丘上に立地する。この付近は古代白河郡の北端にあたり、南東約10kmには白河郡家に比定される関和久遺跡などがある。本調査は、福島空港・あぶくま南道路の建設に伴うもので、一九九九年から二〇〇一年にわたって調査

1 所在地 福島県石川郡玉川村大字小高字江平
2 調査期間 一九九九年（平11）四月～二〇〇〇年一月
3 発掘機関 調査機関（財）福島県文化センター
4 調査担当者 調査主体 福島県教育委員会
5 遺跡の種類 集落跡
6 遺跡の年代 旧石器時代～中世
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

が行なわれている。一九九九年度の調査では、堅穴住居四〇軒、掘立柱建物が八〇棟、土坑一二六基、溝七一条、井戸八基、古墳二三基などが確認されている。このうち出土木簡と同時期あるいは連続する時期の遺構としては、遺跡西半の堅穴住居群と遺跡東半の掘立柱建物群がある。

堅穴住居群は八世紀中頃のもので大型住居を含み、主軸方向をすべて真北に揃えて計画的に配置している。掘立柱建物群は、四面廂付建物を中心とし、建物の向きや重複関係より、大きく二時期に区分される。前半期は四面廂付建物を中心として二～三棟の建物だけで構成され、明確な区画施設を伴わない。後半期の四面廂付建物は、前半期の四面廂付建物より10mほど北側に移動して建てられ、同所で三回の建て替えがある。その南側には二重の溝やそれと平行する柵列、さらに門状建物が組み合わされた区画施設が造られる。これらの建物の年代は、木簡に記載された年紀よりは若干新しく、八世紀後半から九世紀前半頃と考えられる。なお、この周辺から「寺」と書かれた墨書き器が出土していることや木簡の記載内容から、本遺跡を仏教に関連する施設ととらえている。

木簡は遺跡南西部を流れる沢地から出土した。この沢地からは他に土師器や須恵器、竹製縦笛、木製容器・横槌・鍬身などの農耕具、鉄製紡錘車、瓢箪や桃の種子などが出土しており、儀式に用いられた祭祀具を一括して投棄した可能性を考えている。

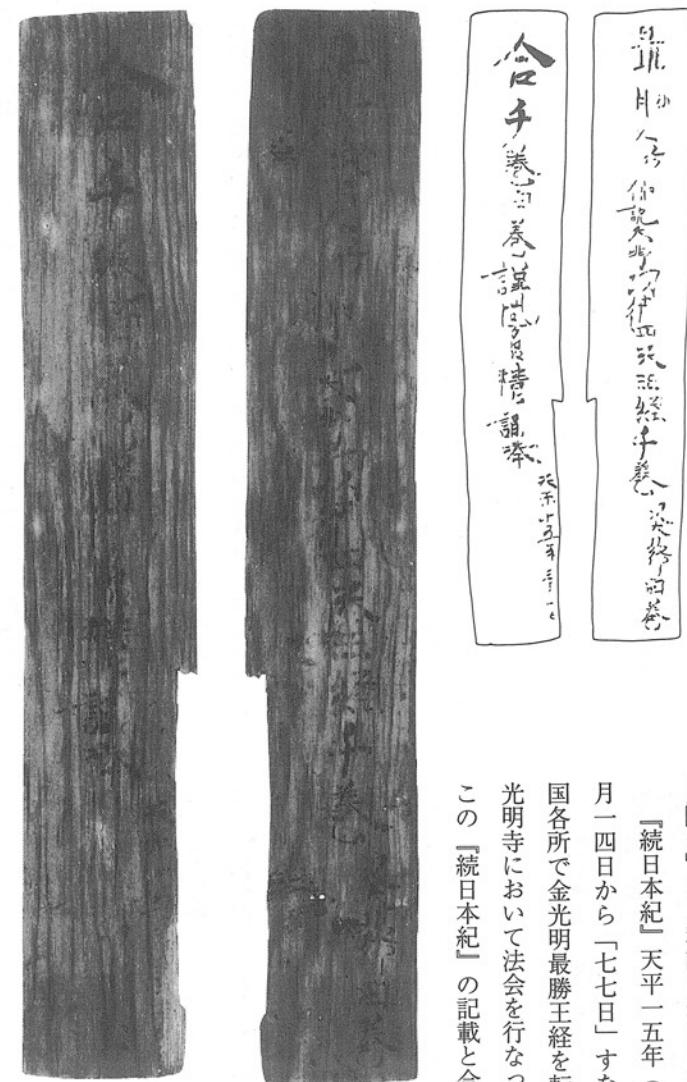
(1) 「最□□□仏説大□功德四天王經千卷 又大□□□百卷」

・「合千卷百卷謹些万呂精誦奉 天平十五年三月□日」

240×36×4
011

左下端側面がわずかに欠損するが、ほぼ完形の短冊型をなす。墨書は表裏両面に認められる。裏面の「三月□日」の「□」は、「一」または「三」であろう。内容は、最勝王經のうち大弁品・功德品・四天王品の三品を「合千卷」、加えて大般若經「百卷」を皆万呂という人物が精誦したことを記録したものと考る。「天平十五年三月□日」は、精誦を終えて本木簡が書き上げられた日付だろう。

『続日本紀』天平一五年(七四三)正月癸丑(二三日)条には、正月一四日から「七七日」すなわち四九日間(終了日は三月三日)、全国各所で金光明最勝王經を転読させ、また大養德国(大和国)の金光明寺において法会を行なつて天下の模範とする。本木簡は、この『続日本紀』の記載と合致するものである。



律令国家は、当初は金光明經(四卷本・八卷本)、神龜五年(七二八)以降は金光明最勝王經(一〇卷本)を鎮護国家の根本經典の一つとして、全国に配布し、その転読を奨励していた。本木簡の表面の「大弁功德四天王」は四天王品・大弁天品・功德天品と三品を列記している点から、金光明經四卷本の卷二

を用いて精誦していたと考えられる。これは政府が金光明最勝王經一〇巻本の普及を奨励したが、天平期の諸国正税帳（例えば天平一年度伊豆国正税帳では「金光明經四巻」とみえる）から明らかなように、天平一五年段階でも地方では金光明經四巻本を使用していたことを裏付けている。

裏面の「：精誦奉」の記載方法については、經典名は異なるが大般若經では、一五世紀前半までは「：大般若經転誦奉」という記載方式だったが、一五世紀後半～末頃に「奉転誦般若經：」という形に変化すると推測されている（鷗谷和彦「中世遺跡出土の大般若經転誦札」〔『網干善教先生華甲記念 考古学論集』一九八八年〕）。本木簡の記載は前者の方式に合致し、本木簡は、中世以降の大般若經転誦札の先駆けとなることも指摘できる。

以上のように、律令国家が命じた金光明最勝王經の転誦が諸国で実際に励行されていたことを、本木簡の発見によって、はじめて陸奥国南部の山間部において、しかも大寺院ではなく簡素な仏教施設と思われる場において立証した意義はきわめて重要である。

なお木簡の解釈には、新川登亀男氏より御教示を頂いた。

9 関係文献

福島県教育委員会・財福島県文化センター「福島空港・あぶくま
南道路遺跡発掘調査報告一二」（二〇〇一年刊行予定）

（福田秀生・平川 南〈国立歴史民俗博物館〉）

宮城・大日南遺跡

だいにちみなみ

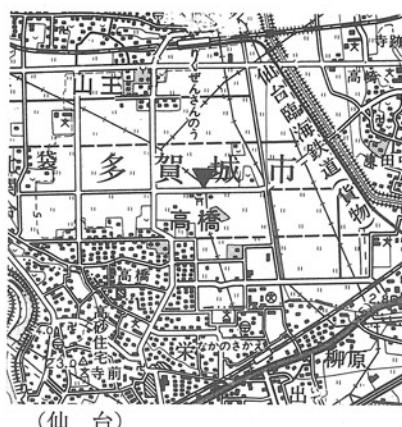
所在地	宮城県多賀城市高橋字大日南・大日北・門間田
調査期間	一九九九年（平11）一月～二月
発掘担当者	石川俊英・齋藤 稔
遺跡の種類	屋敷跡
遺跡の年代	中世
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要	

大日南遺跡は特別史跡多賀城跡の南西約1kmに位置し、海拔4m前後の微高地上に立地している。本遺跡の北側100m～200m

に東西に延びる七北田川の旧河道があり、中世には冠川と呼ばれている。

これまでの調査では、一三世紀～近世初頭にかけての遺構を多數発見している。

特に一五世紀～一六世紀にかけて、溝で囲まれたいくつかの屋敷跡の存在が判明



（仙台）